



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小序
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集6（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内の言及による）。 資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
Issue Date	1966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77286
Type	manuscript
File Information	X062_01.pdf



小序

まだ書き加へたい事項が相多に残つて居る。これとこれで一先づ上梓する事にした。この書は恐らく私の遺稿となる。たうろと思ひながら書いて来たので、これが生きても死んでも、けの草の如く出版される事が出来、文でも七つけの草の如く出版される事がある。

昭和二十二年北大に来た時以来私の研究は都市社会学に集中した。私の北大に於ける社

常

て居る

其後

といふ同一の

序より特殊講義は納十年間毎年都市社会学を
 下で次々と形うし一章を取扱つて来たが、終
 いに三十一年の講義で私の都市社会学の体
 系をなす全十章を一應終へる事が出来た。こ
 うに公にする本書は右の講義案に少しばかり
 推敲を加へたものであふ。
 私は北海道に来て以来殆どずっと厨病しなけ
 ればならなかつたが、然れ少くも元気が出
 れば右の講義案の執筆に没頭した。よい研究
 をしてよい講義をしたいと思ふ気構へ丈に生

て君をか
まで

き甲斐を感じ、又それか精一杯止つてあつたか
ら、私は公私の關係において義理を欠き、禮を失
すゝ事ばかりであつた。北大文学部教授席の
暖かい庇護がなければ、私のこの研究も分満完
成しなかつたものであつた。

この一章の中、論理を完成すゝまでは死ん
ではなうぬと思つた事か何度あつたか分らぬ。
そんなにして全十章をとにかく完成すゝ事が
出来て、それを生きて所は同じ上梓すゝ事か出
来たのは夢の様なき事であつた。

私が都市社会学の研究に志したのは終戦直
 後昭和二十一年、二年頃から東京でC・Eの世
 論調査課の顧問をして居た頃、アメリカの社
 会学、心理学、人類学者等、^{から}アメリカの社会
~~学~~の現状について色々と話しを伺って居た頃の
 事である。アメリカでは澤山の社会学者が澤
 山の分野に分れて皆希望と自信をもつて忙し
 く立上り働いて研究に従事して居る様に見える
 た。農林社会学、都市社会学、教育社会学、犯罪社
 会学、産業社会学、政治社会学、世論調査研究など分

比目

野は分節は甚だ多岐で、それ等の分節毎に或は
程度の業績が積あれて居る。社会に關する全
般的な理論は貧弱であるが、知能が、そ
れ／＼の分節下少くとも常識を整理した丈の
理論は構成されて居る。又、實に周する調査研
究は次第／＼に精進されて居る、と云ふのである。
考へて見れば、私等は實際生活においてば常識
を、しかしてそれを何卒整理して見ようしなないで
判断の基礎として居る場合が多い。①目分量で
判断するのには比すれば物指や計量器を用ゐる

整理し直す

② 学問の爲め世界に於いてはさうである場合が多い。

物としての社会を求めたい

事は甚だ大きな進歩である。各分野の社会をば
 は社会主義に同じく、自分覺によつて物を求め、
 のではなく、單に物指しを用いて物を求め、
 過ぎないかも知れぬが、然しそれは恐るべき進
 歩である。社会全般に關する抽象的な統一の
 理論に誰が同心かない譯ではあるまいか、
 同の世界にも庶民の仕事は澤山のあり、各分
 野における社会的事實に同じ周到綿密な觀察
 を試み、物指しを用いて整理し、その小さな領
 域に過ぎない概念の整理をとり傾向性を求め

④もしかしらう、自分量の判断による考へえは、
市井の世に於て

の世より、
追放されし時、
来るのかと知れぬ。

よく

2月

学問的

小さな仕事は澤山になければならぬ。

見しなりすゝ庶民の仕事に自らも誇りし夢

しあを来ない事はない。誰れも大將になる

なくともよい。孫に誰れも最高位の海に没

頭しなくともよい。あゝ、そんな考へ方に今更ら

思ひ至つて、私も私も研究を始めよう。

丸一つの機縁であつた。には、それは一つの新しい活力となつた。

それから日本の社屋はやはり日本の学者に

よつこのみ最も正確に觀察され得ると云ふ事

である。私は外人の日本の政解はどんな

に進んで居る場合も決して充分であつた。

い
か
ま
事

い
ま
分
に

井
い
ま
は
意
の
世
の
月
光
で
あ
る
意
は
本
質
的
に

他
の
時
で
あ
る
異
界
の
人
に
分
か
る
意
は
其
の
皮
膚

の
意
は
い
か
ん
身
分
の
意
の
心
す
る
意
に
適
み
と
り
得
な

い
る
す
り
あ
る
い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

他
村
の
美
娘
子
に
来
た
若
は
一
代
の
同
正
武
の
意
の
次

将
を
思
め
ぬ
と
ま
り
村
の
意
は
い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

娘
の
心
に
あ
る
い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

木
花
村
の
意
は
い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

化
す
る
い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

い
か
ん
か
を
め
ま
る
氏

⑤ 田舎人に
は近
く
教
育
の
限
界
が
あ
る。
✕

若

よく知った。日本の学問の世界の学界に對する
 最高の貢獻は矢張り日本に存す。事實に同
 ずる。研究であらざるであらざる。日本に於け
 る特殊社會の實の究明は日本人の手によつ
 て最も正しく迅速な結果を著してある。考へて見
 れば日本社會學的實の究明に未だ充分に解な
 者の眼光の下におかれず、^{在るの}ないものは甚だ多
 い。都市に^はまた澤山そんな未踏の領域があ
 る。これに思へた。
 私は日本の都市に同じく若い社會を希望か

もつと活潑に積極的に調査研究すゝとよいと
 は前から思つて居なつてもなかつたけれども、
 外の人々の学術と活して居る（その頃）は、
 の希望が強くなられた。研究を以てその際よく活す
 機会のあつた東京の諸君に都市社会学を勉強し
 たいと云ふ方がとすゝめて見たが、既に浸透し
 てる（サカイ）研究が、あゝめて、それには不
 事であつた。その時私はもう五十を越して居
 たが、それなり旅自身でやつて見やうと心に
 決した。日本の社会学の発展（始めから）の
 ために氏は命を

の一兵九千が

望まれない

心も一人でも多くが、~~必死~~ 様と思
はれたかゝるあゝ。目暮れ道遠く行き着く
あたりは斃れ、かゝり知れぬとは当然に思つた
事であらう。

私はその頃まで農村社会学の
と~~研究~~た。その^{研究}研究する項は次ぎくに私の興味
を惹いては居たが、~~農村社会学~~農村社会学の研究を更に
深めて行く意味からいふその近縁の分野として
の都市社会学は、^{研究に}研究に、^{興味に}興味に、^{関心}関心
あり。分より、^{から関心は常に持て居た。}機会が来ると云々であらう。

を念す。

本来都市社会学の研究にはアメリカルリ日

本にも多数の学者の業績既に現はれて居る

。私がこれに比分類の研究に加入して

蛇足を加へる必要はないのであるけれど

私は村落の研究に従事した二十年近頃の

経験があり。その経験によつて村落は知識

力のある都市社会学に比して都市社会学に

生きた片がない。けれど都市の構成原理には

村落の構成原理が全関係にある筈はあつて予

想が私の頭を去らず、この事が私をして都市社会学

私は都市を瞭解するに甚だ恵まれた機会をもつて
片よのかれ知れぬと云々思ふよい考へもある、
（たゞ）

敢然と

乃々の研究に近かづいた最に松澤の原因であ
つたに違いない。

日本及び

けれども私は最初はアメリカに於け。都市社会学者の業績を紹介して日本に於け。私なりに考へ。都市社会学者の問題は大丈でも述べてそれで一應の拾石の役を果たしたいと思つたのであつた。

私が北大に來たのは昭和二十二年九月であつたが、その年の十二月に北海道に於け。私の最初の論文として「都市の政治性」を題す。一文を草した。これは私が発病する前に書いた都市に関する唯一の論文である。「健民」を題す。報

誌のめい書いたのであ。その論文は次の年の
 五月号に掲載されてあつたゆゑであ。か、下巻を
 の隔かう、病床に倒れその後長い療養生活に入
 ったので、その雑誌は未だに見、裁断を得ない
 のであ。何事か混沌多秋の時代でもあつた
 からどこかに紛れ込んでしまつたのであうり

知は物に凝る性分であ。かう都市社会をこ
 考へ始めればそれ丈に心を奪はれて居た。病
 院かうあつたかは、カミヤカの都市社会をこ
 リ本をよみあさうと共に、常に曲居た社会をこ

研究に力を入れしを感服した時もさうであつた
 様には、^{（？）}規模のおさい果最も単純な都市を調
 査してそこに都市の構造の縮図を見せようといふ
 思ふ事もある。だけれどその希望は従つて
 終り^{（？）}暗に模範の時代が暫くつゞいた。^{（？）}（奥井復
 木郎氏の現代大都市論をいみじくと讀み返して
 見て、此書の愛読した内容に余更らの襟に感服し
 たる頃、^{（？）}木内信義氏の「都市地理学」の研究と磯村
 英一氏の「都市社会学」が公刊された。私が拙な
 い論文を^{（？）}加へて社会学におけよ此方面の発展

私の肉作が病魔に犯されて行くのには各関係に

はない

燃

の力に捨てるにた。は要もなくた。思つた事

もあ。けれども私の研究の興味は燃えさか

はかりで、都市を複雑にあらはあ。丈、都

市に美す。諸者の理論に残る。此の居る。向也や徹底した

事柄を見せれば見出す。私の探定の意欲は

増して行くばかりであつた。けれども私の病氣

は生死を往来する。様な重態を繰り返して居た

都市の社会構造に因る。見解があらわな

はより死んでしよ。思ふ。都市の機能を明

いかにする事か。と来りし。や。あり。あつた。

うれしかった。

かう

生の後俄かに突如に出来た。研定は氣持
 ちよく進んだ。少し勉強しては倒れ、病席生
 活が相成るについで、いよいよ元氣を失ひ、戻しては又執
 事して倒れ、又倒れ、と云々事を繰り返し
 て居た。この一季まで完成すればもう死んで
 もよいと何處思つた事でもあらず。昭和三十年
 夏から化学療法を用ふに及び三十二年春
 かうはもう色に危険状態はあつた。なくなつ
 た。

よくもこの病氣に堪へよくもこの一書が完

成したもののたと我ながら不思議に思つて居る。
業なればかゝる此本は当然に遺稿^{から}として出版さ
れるに違ひないから正しく読まれる様にとて
草稿の粗雑な行文^{（常に）}を流石にも読み易くすゝめ
にいつも心をつくばつて居た。自筆で書いた原
稿でお出版する事は夢の様な事と思ふ。

私は先に社会学の一兵卒の研究として社会学
の各分野に於ける調査研究に従事する事に建
設的な意義がある事を述べたが、私は社会学
の研究は社会学に於ける基本的構造の研究
な

目次

明と云ふ事に對する研究の貢獻を期待するに、
そのと考へる事には昔より變りなへが、そ
の事と社會生活の各分野の調査研究と云ふ
事とは矛盾がある様に思へるのであるが、然し
それは根據なき事ではない。私のこの都市社
會論は都市生活の^{金田}基本的な構造を究
明して居るのである。そして又それは事實
に關する調査研究をよそにして論議されて居る
ものでない。私はそんな大それた科學的處
理の一筋とこの本の中程と果してみようと試みて

渡りつた
シーンとした

一向に

⑤ 阿豆伯た人はかりの席へは活しは通不た。一人の男か若か

来々々口をきけば活題は五々かう通んで行く。
恥知らずの

和の氏本都多社々々の下りしれ席へは活し
を伴ふ男か若の夏事かおまわは常である。
糸はルでしなり縁水は
と見てみる。

居るのてあや。此の書の出来が試みたるやうな概算の算見と考
 ④
 私の都市経済学への研究に國の内外の先輩
 諸学者に学ぶところが相当地多かつた事は当然
 であり、然し私のこの研究に最も力となつ
 たのは私の教室の助手達と学生達であつた
 。私のこの研究は全くそれ等の諸君との協
 力によつて完成されたのである。私の二人の助
 手笹森秀雄君と富川成興君が私の手と
 なり足となり私自身を試みるよりむしろ活
 躍に正確に調査してくれなかつたらこの研究

である。

はじめて成就した事なかつたものである。

昭和三十一年春

札幌市の寓居にて

鈴木榮太郎識